

## C-16

### 長野県入笠山の大形地衣類相

○宮澤研人<sup>1)</sup>・大村嘉人<sup>2)</sup>・出川洋介<sup>3)</sup> (<sup>1)</sup> 筑波大学生物資源学類; <sup>2)</sup> 国立科学博物館; <sup>3)</sup> 筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所)

Macrolichens of Mt. Nyukasa and the adjacent area in Nagano Prefecture by K. Miyazawa<sup>1)</sup>, Y. Ohmura<sup>2)</sup>, Y. Degawa<sup>3)</sup> (<sup>1)</sup> College of Agro-Biological Resource Sciences, University of Tsukuba; <sup>2)</sup> National Museum of Nature and Science; <sup>3)</sup> Sugadaira Research Station, Mountain Research Center, University of Tsukuba)

長野県南アルプス北端に位置する入笠山（標高 1,955 m）及びその周辺地域（以下、入笠山）は、山頂の岩場、カラムツやコメツガを中心とした針葉樹林、石灰岩地、湿原、牧場など多様な環境を含む。地衣類については、網羅的なフロラ調査の報告がなされていないが、環境省絶滅危惧Ⅰ類に選定されているニュウガサウメノキゴケ *Hypotrachyna sinuosa* や清浄な環境に生育するサルオガセ属 *Usnea* が複数種見られることから特徴的な地衣類相を形成していると予想された。そこで本研究は入笠山の大形地衣類相を明らかにし、植物地理学的考察を試みることを目的とした。

2018 年 8 月 8 日から 22 日の 13 日間にかけて現地調査を行った。得られた 264 点の標本について形態および化学成分を検討し、文献と国立科学博物館の標本を参考にして同定を行った。これまでに 34 属 63 種を確認し、30%は汎温帯要素、19%は北東アジア要素、9%は寒帯要素、他 7 要素に区分された。興味深い種としてニュウガサウメノキゴケ、クチビルムカデコゴケ *Physciella chloantha* を確認した。前者は、入笠山では針葉樹の枝先といった目の届かない場所に生育していることが多かったため、他の地域でも同様な生息環境で見落とされていないか精査する必要がある。後者は石灰岩上の個体を確認した。これまで広島、山口、岩手県の石灰岩地から報告されていたが、今回が中部地方で初の報告となる。